

■森山明子氏インタビュー調査記録

国際デザイン交流協会設立の頃を振り返る

[日時] 2020年3月18日(水) 13:00~16:00

[場所] 静岡文化芸術大学黒田研究室

[出席] 森山明子/青木史郎、黒田宏治

*森山明子:1953年新潟県生まれ、1975年東京藝術大学美術学部芸術学科卒業、特許庁意匠審査官、日経BP社「日経デザイン」編集長等を経て、1998年より武蔵野美術大学教授。デザインジャーナリスト。1982-83年に財団法人国際デザイン交流協会にて企画調整課長を務めた。



[目次]

- 国デ協出向に至る経緯
 - 国デ協出向15ヶ月の顛末
 - 第1回フェスティバルの実際と問題点
 - 国デ協設立前後の国際的文化状況
 - 国デ協設立の背景、問題、大阪との関係
- +++++

●国デ協出向に至る経緯

私は大阪にある財団法人国際デザイン交流協会(以下、国デ協)に設立から数年在職し、事業の立ち上げに携わっていたと思われるようですが、それは誤解でして、実は15ヶ月間の出向だったことから話しておきたいと思います。私が国デ協に着任したのは1982年9月、国デ協設立の1981年11月から1年くらいたってからで、第1回国際デザイン・フェスティバル(以下、フェスティバル)開催の約1年前の時期にあたります。

国デ協は通産省の主導で1981年11月に設立されました。ただ、職員は地元大阪の官民からの出向組ばかりで言えば寄せ集め、ICSID'73KYOTOで事務局長を務めた木村一男さんだけがデザインに精通したプロパーという構成でした。でも木村さんは民間人ですから通産省にすれば意思疎通に難もあったようで、通産省主導で設立した財団にもかかわらず東京の通産省側では状況がよくわからない状況が続き、それで本省から誰か人を送り込もうということになったようです。

かといって所管の検査デザイン課には適材がおらず、それで特許庁意匠課にお鉢が回ってきたと聞いています。ただ意匠課では、通産省検査デザイン課以外に審査官の出向経験はあまりなく、また出向先で求められる知識が知財、とりわけ意匠権の関係でもなく、困ったというのが率直なところだったと思われます。期間も数年にわたる見込みでしたからまずは独身であることが条件で、通産省から企画調整課長で行くので若すぎても駄目。で、私に打診が回ってきたようです。

当時私は入庁7年目で、型材の意匠審査担当から審査対象の物品分類改定業務担当を終えた時期で、少し気分転換もいかなどの思いもあり、引き受けることといたしました。出向先が国デ協でデザイン関連の国際業務になりますから、3ヶ月くらい英語と英文タイプを学び、数日間はデザイン事務所で現場研修も経験して、1982年9月1日にサンローランの赤い麻のワンピースを身にまとい黒い帽子をかぶって国デ協のオフィスに赴任いたしました。

●国デ協出向15ヶ月の顛末

実際に行ってみるとトップは日本貿易振興会(JETRO)出身で、幹部職員には大阪府、大阪市、民間企業はサントリー、松下電器、サンヨー、シャープの4社から40~50歳くらいの出向者が並び、そのほかにアシスタントの女性(英語に堪能な神戸女学院大学卒業者など)が数人。唯一出向者ではないのが事務局長の木村一男さんでした。当時はまだ木村さんとのご縁がなく、そこに私が前述の身なりで登場したわけで、だいぶ戸惑われたのではと想像されます。協会は当時ですから女性が来るとは思っていないし、通産省がこの財団を軽視しているのか、あるいはよほどの切れ者かと疑われた節がありました(どちらでもなかったのですが)。

行ってみてわかったのは、ともかく通産省（「notorious MITI」の呼び名がまだありました）が偉いわけです。通産省の前・検査デザイン課長であった久禮彦治さんが基金を集めて設立した協会の人たちは当初、通産産業技官の私の扱いを決めかねていたところがありました。ともあれフェスティバルの実施準備は動き出しており、私は国際コンペの実施をどうするか、アオードの推薦をどうとりまとめるか、そのあたりの仕事を主に担当することとなりました。幸い、女性のアシスタントのみなさんは私に協力的でしたので、仕事の方はそれなりに順調に進めることができました。

そして、第1回フェスティバルが終了した直後のことでしたが、国会で中央官庁全体から関係団体等に出向している職員の身元と資金源を調査せよと野党から追及の声があがりました。私の場合は通産省から退職出向のかたちでしたが、費用の出所はやや複雑でした。それで通産省から急遽引き上げろと指示が出たわけです。あまり急なことで送別会もなしで、石もて追われるごとく12月に通産省検査デザイン課に帰任しました。出向期間が変則的な15ヶ月だったというのは、そのような事情があったからです。大阪側にしてみれば、国の都合で勝手に人を送ってきて、そして勝手に引き揚げたわけですから、いい印象が持たれたはずはありません。

とりあえず通産省に帰任することになり、1ヶ月後には特許庁に戻る予定でしたから、検査デザイン課のために引継ぎ資料を残そうと思い、急ぎ「第1回国際デザイン・フェスティバルの意味と展望」という400字詰め100枚くらいの半ば私的なレポートを作成して野口宣也課長に提出しました。非公開の内部資料ですからだいぶ辛辣なことも書きました。そうしたら何を思われたか野口課長が、国デ協の理事・委員等に課長の前文付きで印刷しての限定配布を決めたのです。その結果、大阪ではやっぱり「スパイ」だったんじゃないかみたいを受け取られ、以降、大阪には行きづらくなってしまいました。

私が国デ協に出向するにあたり野口課長からは二つのミッションを指示されました。一人ですべて対応できるとは思えないから適宜情報は伝えること、もう一つは日本経済新聞大阪本社の経済部長が知り合いだから、あなたは彼を「籠絡」して日経新聞に、少なくとも大阪版には、デザインの記事をばんばん出すよう仕向けること。実際、下村寛治経済部長は紙面に数々記事を書いてくれました。ですから不幸にも1985年に御巣鷹山日航機墜落事故で亡くなられてしまったのが残念でなりません。彼の最後の記事は国デ協に関する記事で、亡くなられた後にその掲載紙が私宛に届いたことを覚えています。

●第1回フェスティバルの実際と問題点

国際デザイン・フェスティバルは、国際デザイン・コンペティション（以下、コンペ）、国際デザイン・アオード（以下、アオード）、そして国際デザイン展（以下、デザイン展）から構成されました。付随していくつかのセミナー、講演会等も実施されましたが、それらは割愛することとします。それぞれの実施概要は公式の報告書等（*1）をご覧ください。主催者側に身を置いた私なりの見え方、評価について、記憶の範囲になりますが、お話ししておきたいと思います。

まず国際コンペですが、これは「集 shu」をテーマに、デザイン全分野を対象にした、賞金総額2千万円（大賞賞金1千万円）のデザインコンペで、国際的にはかなりのインパクトがあったと考えています。国デ協の告知広報が不足していたにもかかわらず、53カ国756人（うち海外401人）から作品応募が寄せられました。決して少ない数ではありません。よくこれだけの応募があったものだと感心したことを覚えています。米国・イリノイ工科大学の教員・学生チームの「未来の家」が旧来の建築・プロダクト等の領域を越えた未来志向の研究型プロジェクトとして高く評価され、2次の審査選考を経て大賞に輝きました。

ただ、テーマ「集」に関しては難解との声もあり、発表以来デザイン関係者・国デ協関係者の中で批判的な指摘も多く寄せられたことは伝えておきます。テーマ「集」は私が着任した時点では既に決まっており、その後も同じ路線で「交」「水」などと続けました。国デ協立ち上げに尽力された方からは、サステナブルデザインないし途上国支援のデザインのようなテーマをイメージしていたと後で聞きました。また、吉田光邦氏は国デ協・フェスティバルの発展形として、発展途上国を視野に入れて世界に対して日本が貢献できる教育と研究のための国際機関の設立を提案されておられました。財団のあり方とテーマの方向性として考えさせられました。また、情報のアウトプットが重要であるにもかかわらず、コンペ結果発表後の論評記事が少なかったこと、国内外の応募者への適切なフォローアップが行えなかったことは、改善課題でした。

アオードについては、受賞者は既に高い国際的評価を得ていた英国のペンタグラム、ポストモダンの旗手であるイタリアのナボーネ、それに米国のチェマイエフ&ガイスマー、北欧スウェーデンのベンクソン&ジューリンの4名（チーム）、そして英国のサッチャー首相が名誉賞という顔ぶれでした。受賞者の4名（チーム）は地理的にも分野的にもバランスのとれた構成だったと思います。サッチャー首相の名誉賞に関しては、一国の首相がデザインの重要性を説きデザイン政策を展開したという理由からでしたが、国内ではインパク

トがあったものの欧州の来日デザイン関係者からは論外との声も聞かれました。首相はアカデミズムの破壊者と見られていた面があったのです。また、サッチャー首相については国内外 22 名の推薦人から推薦があったのではなく、審査員のアイデアだったことで、これも推薦人軽視と問題視されました。

1983 年 10 月のアオード表彰式典には、受賞者 4 名（チーム）はいずれも本人が来日参列いたしました。これはアオード事業にとって意味があることでした。受賞者それぞれが横並びを気にするわけで、全員参加は受賞者の皆さんにも納得いただけたということですから。名誉賞のサッチャー首相に関しては、当時外交官として著名だったヒュー・コータッチィ駐日大使が代理で駆けつけてくれて、アオード事業の格を保つことができたと考えています。当時の国際情勢の中で英国側の日本デザインへの幾分かのリスペクトの証であったかもしれません。それらを総合的に勘案して、第 1 回のアオード事業は成功だったと思っています。ただその後を見ていると、アオード受賞者との関係がそれっきりで継続しておらず、もったいないとの感を抱きました。

1983 年秋に大阪城ホールで開催されたデザイン展は、コンペ、アオードの展示を含む主催者の企画展示と企業展示とから構成されました。デザイン展の評価はさまざまでしたが、佐藤和子さんが監修したイタリア・デザインの展示コーナーや小池一子さん監修のオール・デコの展示コーナーは、見応えがあったと記憶しています。会期中には目標 18 万人に対して 27 万人の入場者を得ることができ、海外で話題のデザイン・イベントと同列には語れませんが、初回でもありませんは相応の成果と言って差し支えないと思っています。ただしこの数字は柿落としの大阪城ホール入場と抱き合わせであって、デザイン展単独の数字ではなかったのです。

企業展示に関して言えば、トヨタ、松下、サントリー、資生堂、オリベッティ、ブラウンなど国内外 12 社の協賛展示がありましたが、少なからず製品展示会のようにであったという意味で、課題を残した言えなくもありませんでした。その要因が、当時の日本企業のデザイン認識の問題であったのか、あるいは主催者である国デ協側のポリシー不在に求められるのかは、議論があったと記憶します。ただ各社ともデザインに高い関心を持って取り組まれたのは事実であり、うまく続けられれば意味はあったと思えました。

あと表面には出ませんでした。展示会（博報堂）と PR 出版等広報（電通）を担当する代理店が異なったことにより、十分な連携が図れずに終わったことは悔いが残るところでした。恒久開催を掲げたにもかかわらず

らず代理店まかせで、デザイン展の企画運営ノウハウが国デ協内に蓄積されていない現実には疑問を感じました。コンペ審査員だった栄久庵憲司氏も、面倒だから代理店に依存するという方式を採ったことにより、協会も企業も知的鍛錬の機会を逃したのではないかといった趣旨のことを、ある席上述べておられました。

関西圏の一般観客を中心に 27 万人の入場者を集め、比較的高い満足度も得られたようであり、デザインの国民的認識の喚起・深化という目的は達せられたと言えたかもしれません。一方で、デザイン専門家の目にはポリシーのはっきりしないショーに映ったようでもあり、また国際広報不足もありデザイン展、ひいてはフェスティバルが十分な広がりを得られなかったとも感じました。田中一光氏はデザイン展のチラシを見て、「デザインの大衆化を、質を下げることはき違えている」と憤慨されました。デザインコントロールの質的な面に組織として配慮が行き届かなかったということでしょう。

●国デ協設立前後の国際的文化状況

国デ協在職最後にヨーロッパ出張に行かせてもらいました。ちょうど 1983 年秋には、パリの装飾美術館で「EXPO の EXPO」展をやっており、視察の機会を得ることができたのです。キュレーターは同館館長のイボンヌ・ブリュナメールさん、フェスティバル関連のセミナーで来阪の折には木村さんと一緒に心齋橋の路上で踊った仲ですが、親日家でとてもチャーミングな女性です。

「EXPO の EXPO」展を見ると、大阪万博は万博史上最大の 6 千 4 百万人の入場者数を誇ったものの、フランス的な眼で見ると「あんなもの人数を集めただけじゃないか」と、万博の歴史でエポックメイキングなものは何もないという評価で、抹殺こそされていませんでしたが、すごく小さな扱いだっただが印象的でした。当時はまだ、アジアでの開催というやや差別的なこともあったのだろうとは思いますが、とにかく大阪が万博を通してクリエイティブな世界で国際性を持ったというのは幻想でした。大阪万博のテーマはデザインでもアートでもないにせよ、欧州、特にフランスにとってコンセプト的に見るべきイベントではなかったということがわかりました。

大阪万博の国際的評価は措くとして、オイルショック後から 85 年頃までは、欧米の知識層にとって、日本の経済力、工業力、それに含まれるデザイン、そして 2 千年の歴史ある文化、そういうものに不思議な関心が持たれた時期だったと言うことができます。世界を揺るがした 1973 年と 1979 年の 2 度のオイルショックを一番上手に乗り切った国は日本だという国際的評価

があり、1980年代になると日本は乗用車と半導体で世界第一、85年には西ドイツを抜いて世界第一位の工業製品輸出に浮上して貿易摩擦が起こります。日本の経営に注目が集まり、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（日米 1979 年刊）が米国でも日本でもベストセラーになったのはご記憶のことと思います。

文化面に関していうと、1978年に「間—日本の時空間」という展覧会がパリの装飾美術館で開催され好評を博しました。企画は建築の磯崎新、現代音楽の武満徹、演劇の鈴木忠志、ファッションの三宅一生などが展示に参加し、「数奇（すき）」「移（うつろい）」「遊（すさび）」など7つをキーコンセプトに展開して、カタログの編集は松岡正剛、デザインは杉浦康平という錚々たる顔ぶれでした。当初はパリだけで開催の予定でしたが、パリで予想以上の話題を集めた結果、展覧会はニューヨークをはじめ欧米の5都市を巡回することになりました。

さらに1980年には、ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館で「ジャパニスタイル」展が開催されました。清家清、田中一光らを中心に企画された展覧会ですが、こちらも大人気を博しました。ロンドンでは、美術館はハイブローな展示ばかりやってくるんじゃない、そもそも市民のための施設だという価値転換が起こり、日本のモダンデザインを並べようとの日本側の企画が博物館側から否定され、企画をやり直したと聞いています。だいぶ頭を抱えたようですが、田中一光が中心になり、起き上がりこぼしやキオスク、凧揚げの凧など日本の日常生活の中に根ざしている無名性のデザインと、剣持勇や三宅一生などの先進的なデザイナーの作品を対比させて取り上げることとなりました。この展覧会ではカタログの編集・デザインも田中一光が担当しています。

この2つ展覧会が、日本の美意識や造形のあり様を海外で印象づけたと評されもします。ですが、私に言わせればもう一つあって、1975年にニューヨークのジャパンハウスギャラリーで開かれた岡秀行企画の「包む—日本の伝統パッケージ」展を挙げたい。米国デザイン界の重鎮であるジョージ・ネルソンが展覧会以前に『How to Wrap 5Eggs』（ウエザヒル出版社、1967年）のために書いた「一つの時代の記念碑」が感動的です。「TSUTSUMU」と呼ばれてニューヨークで注目されたことを受け、1979年のオーストラリア展からは国際交流基金がサポートして巡回展は世界中で99回を数えました。最後の100回目は1988年に目黒区美術館で開催され、同館の収蔵品となった後の2011年にも開催が実現しました。

アジア諸国は日本の経済力に注目し、欧米ではこうした展覧会などの影響もあって、1980年頃には日本の

文化やデザインへの関心も高まっていたので、1981年の国デ協の設立というのは非常にタイムリーであったと考えられます。ですから国デ協並びにフェスティバル事業には、当時国際的にも大きな可能性があったと思うわけです。

●国デ協設立の背景、問題、大阪との関係

国際交流基金という、世界各地で総合的に国際交流イベントを展開する国が設置した日本で唯一の専門機関があります。英語名ではThe Japan Foundationですが、国際デザイン交流協会（Japan Design Foundation）は、英語名を見ればわかる通り、その国際交流基金のデザイン版を目指すところから始まった面があります。大きな風呂敷を広げてスタートしたと思えなくもありませんが、設立にあたって国際性への高い志はあったということができます。実際、設立時の構想委員会といった委員リストには、丹下健三、堺屋太一はじめ、東京からも大阪からも国際性で名前が浮かぶ人たちが名を連ねており、リージョナルではなくナショナルな位置づけであったことがわかります。

それに対して組織面で実体が伴っていなかったことは問題であったと言えるでしょう。前述のように国際的にも追い風が吹いたにもかかわらずです。実務的なところでは、国デ協の中でデザイン分野の国際的な人脈がある人は事務局長唯一人だったことは、国デ協の基本的な問題です。国際性以前に、デザイン界きっての立役者だった勝見勝氏から電話がかかってくる、「どちらの勝見さんですか」といった感じでしたから、デザイン界に明るい人から見れば笑うに笑えないような現実が、国デ協のオフィスにはあったのです。

また歴史を振り返るならば、大阪には東京よりも早い時期からデザイン団体が数々あり、デザイナーも多く活動していたという経緯がありました。にもかかわらず、大阪ネイティブのデザイナーは国デ協の活動にはあまり関係していませんでした。各種委員会等の構成を見れば、大高猛や沢村徹など何人かの在阪デザイナーの名前を目にすることはありましたが、なぜか大阪万博 EXP070 の人脈に限られており、それも実務的には深い関係にあったとは言えませんでした。大阪デザイン界と国デ協との関係の薄さは、どこかで考えるべき課題だったのかもしれない。

1950年代後半以降、「Aクラブ」の永井一正、田中一光、木村恒久など後のスターデザイナーが大阪から東京に拠点を移していきました。大阪万博は大成功だったと言われることが多いのですが、大阪デザイン界にとっては「終わりの始まり」で、その前後にデザイナーの東京への移転は加速され、デザイン人材については空洞化が進行したと聞いています。私が大阪に赴任

したのは1982年でしたが、もうその頃には大阪のデザイナーの結束力は弱くなっていったということもあったんだと思います。

大阪には東京を嫌う風土というか、東京への強い対抗心があるのはご存知かと思います。戦前は東京より人口が多く、名実ともに産業経済で日本の中心との自負もあり、「大大阪」と呼ばれた時代がありました。それが戦後になって人口が逆転され、経済的にもだんだん地位が下がってまいりました。ただ1970年の大阪万博の成功で一時自信を取り戻したようなところがあり、国デ協の設立はそれから約10年を経た時期でまだその余韻が残り、大阪にはもう一度国際的に何かをやりたいという気運はあったと感じました。通産省の大先輩にあたる堺屋太一さんに会うと、「僕は大阪万博を成功させた。君は国際デザイン交流協会を成功させるんだ」、そんなふうに使われたことがありました。

ただ大阪万博は成功といってもテンポラリーなものでしたから、万博の成功を足場に恒久的なものが求められ、国デ協を大阪に置けば世界で注目を集めるデザインで東京を凌駕できるぐらいのことを言って前・検査デザイン課長だった久禮彦治さんは大阪の行政や財界を説得したのだと想像します。大阪側も長期低落傾向を止める一つの起爆剤として、国デ協の大阪誘致に期待はあったはず。だからこそ8億円（大阪で4億円）もの基金が集まったわけです。そして、大阪府市等から国デ協への出向組の多くは、30代そこそこで大阪万博に携わった人たちで、職員の側でも国デ協に対してそれに近い思いは一部共有されていたように思います。

そのような雰囲気にも包まれた大阪の国デ協に、私は東京の通産省から一人落下傘で降下したわけで、不思議なニュアンスに囲まれることになりましたが、国デ協という一つのデザインムーブメントの立ち上げに立ち会うことができ、個人としてはすごく意味のある経験となりました。

尚、隔年開催のフェスティバルは第10回(2001年)をもって終了し、国デ協そのものも2009年3月に解散しています。私は設立間もない時期に短期間在職しただけで国デ協を離れてしまい、その後についてはコメントする立場にありませんが、バブル崩壊を境に低金利社会が訪やってくるまで基金の運用益が激減したことと、国デ協独自の収益事業を生み出せなかったことに、解散の要因が求められるのではないかと考えられます。

40年近く前の私のレポートの最後には国デ協の課題として、方針レベルから事業運営、組織体制にわたって20項目の課題を列挙していました(*2)。よくもこんなに指摘したものだと思います。ざっと読み返すと「財政・運営等の基礎固めすること」に始まり、

「プロパー職員の採用育成を計画的に行うこと」で締められています。これらはGマーク事業を担う日本デザイン振興会との違いでもあり、今思うとこの最初と最後に記した2項目が、国デ協に身を置いたゆえに見えた課題の根本だったように思えてなりません。

(*1) 第1回デザイン・フェスティバル公式報告書等
『第1回国際デザイン・フェスティバル』財団法人国際デザイン交流協会、1983年(*1)
『国際デザイン交流協会 10年のあゆみ』財団法人国際デザイン交流協会、1992年(*1)

(*2) 国際デザイン交流協会の課題（要約）

[協会事業の基本的考え方]

1. 財政・運営等の基礎固めを図ること
2. コンペ・アオードの国際的評価の確立
3. 事業の質的向上に充分意を注ぐこと
4. 協会が主体的に事業を遂行すること
5. フェスティバル以外の国際交流事業の検討
6. 海外での日本デザイン展開の検討
[協会が行うべき具体案]
7. デザイナーの会員制を全国的に呼びかける
8. 日英両文の機関誌の定期刊行体制の整備
9. 海外との経常的な情報交換体制の強化
10. 第2回コンペのプロモーション体制を検討
11. コンペとは別にデザイン批評賞を設置
12. アオードに具体的テーマ設定を検討
13. 2年間分の事業を企画し連続感を出す
14. 国際会議誘致、海外機関との共同研究
15. 第2回フェスティバル基本事項の検討
16. 海外関係へのきめ細かな対応
[協会の新体制について]
17. 推進委員を評議員と位置づけ事業計画等を諮問
18. 運営委員会体制の再検討
19. 基本構想委員会、審査実行委員会、WGを設置
20. プロパー職員の採用育成を計画的に行う

*参考資料：

1. 『第1回国際デザイン・フェスティバル』財団法人国際デザイン交流協会、1983年
2. 『国際デザイン交流協会 10年のあゆみ』財団法人国際デザイン交流協会、1992年
3. 森山明子「デザイン行政とデザイン・ミュージアム」『デザイン学研究特集号 Vol. 14, No. 3』（日本デザイン学会、2007年）所収
4. 森山明子『デザイン・ジャーナリズム 取材と共謀 1987→2015』美学出版、2015年

（文責：黒田宏治）2020.04.09